

---

# 月下の幻影

山岡屋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月下の幻影

### 【Nコード】

N3733Z

### 【作者名】

山岡屋

### 【あらすじ】

庶民上がりの切れ者君主は、時々不思議な行動をとる。護衛に任命された月海<sup>つきみ</sup>は、彼の不思議を探るうちに、十二年前の出来事と彼の深い想いに触れる事になる。  
戦が続く和風異世界の物語。

以前、サイトで公開していたものです。

## 1・庶民な君主

昼食時の城内食堂が今日は奇妙な静けさに包まれていた。いつもなら城内官吏が一斉にやって来るので、かなりざわついているのだ。ヒソヒソ声は聞こえるものの、そこにいる人数に対してあり得ない静けさだった。

「ここに来るの久しぶりだけど、今日はやけに静かだな」

うどんをすすりながら和成かずなりは問いかけた。その音が静かな室内に響き渡る。

「よろしいのですか？　このような所でお食事などなさって」

和成の向かいに座った慎平しんぺいが、冷めた目で見つめながら問いかけた。和成は思いきり顔をしかめると非難するように慎平を睨んだ。

「」なさって」とか言うなよ」

「塔矢とうや殿でさえ敬語なのに、私がただけるわけにはまいりません」

「塔矢殿だって俺と二人きりの時は今まで通りなんだよ。今は休憩時間だし、おまえも今まで通りでいいんだよ」

笑う和成を見つめて慎平は軽いため息をついた。

「無理ですよ。これだけ注目されてたら」

慎平に言われて、和成は初めて周りの様子を見回した。和成と慎平の座る机を遠巻きにして、食堂に集うものたちが和成に注目している。食堂の静けさの原因はこれだったのだ。

和成は箸を置くと思わず笑顔を引きつらせた。

「なんで？　そんな珍しいものでも見るみたい……」

慎平が呆れたように大きくため息をつく。

「君主がこのような所で下々の者にまざって、うどんなんか召し上がっていれば十分に珍しいです。ご自身のお立場をご自覚下さい」

和成は片手で頬杖をつくと目を細くして慎平を見つめた。

「それ、俺が毎日紗也様に言ってた言葉だ」

慎平は少し目を見開いた。

「紗也様……」

そして、懐かしそうに遠い目をして微笑んだ。

「懐かしい名前ですね」

和成は少し不思議そうな表情を浮かべた後、すぐに納得して小刻みに頷いた。

「あ、そうか。もう十二年経つんだっただな。俺は毎日考えてるからそんなに経つてるとは気付かなかった。確かに懐かしいかもな」

「毎日ですか？」

当然のようにサラリと言う和成に慎平は驚いて問い返した。

「悪いかよ」

ふてくされたようにそっぽを向く和成を見て慎平はクスリと笑った。

「いえ。以前、佐矢子殿が言ってたじゃないですか。和成様は機械でできた人形のようなだと。あの頃は私も和成様は他人に対して淡泊な方だと思っていましたから、こんなにも深くひとりの人を愛する方だとは存じませんでした」

和成は少し照れくさそうに慎平を見つめて問いかけた。

「いつから気付いてた？ 俺が紗也様を想っている事」

慎平は少しためらうように答えた。

「……あの時まで、気付きませんでした。だから、あの後和成様の落胆ぶりを見て、私の身勝手でお引き止めしてしまった事を少し後悔しました」

「俺も謹慎中はずっと後悔してたよ」

和成は紗也を見送った後、あらゆる事を繰り返し悔やんでいた。どうして紗也から目を離れたのか。どうして自分の身の安全にもっと気を配っていなかったのか。どうして紗也の出陣をもっと強く反対しなかったのか。敵の動きがおかしい事に気がついていたのに、どうして刺客の存在に気付かなかったのか。どうして自分はまだ生

き恥をさらしているのか。

だが、いくら悔やんだところで時間も紗也も戻っては来ない。

紗也から国の未来を託されていた事を塔矢に告げられ、やっと前向きになれた。

本当はあの時、慎平が止めなければ戦も国も全て放り出して紗也の元へ行きたかった。そうなっていれば、圧倒的な戦力差で、あの戦には負けていたかもしれない。

そして、紗也の願う平和は訪れることなく、君主不在の杉森国は衰退し消滅していただろう。

「今の俺の命は、紗也様の夢見た未来を築くためにある。ちゃんと礼を言っただけだったな。あの時、引き止めてくれた事、感謝してる」

「そう言っていただけで、私も肩の荷が下りました」

静かに微笑む慎平を見た後、和成が再びうどんをすすり始めた時、静かな食堂に塔矢が怒鳴り込んできた。

「殿　っ！」

塔矢の怒鳴り声で、和成を遠巻きにしていた人垣が真ん中から左右に分かれる。器と箸を持ったまま顔を上げた和成を目掛けて塔矢が大腿で歩み寄って来た。

塔矢は笑顔で和成を見下ろすと静かに言う。しかし、目は笑っていない。

「食事もなさらず、どこをほっつき歩いているのかと思えば、このようなどころで何をなさっておいでですか？　侍従長が捜しておりましたぞ」

和成は苦笑を湛えて、上目遣いに塔矢を見上げた。

「久しぶりに食堂のうどんが食べたくなったので、私の食事はみんなで食べてくれるように書き置きは残してきたんですけど……」

「書き置きは拝見いたしました。ですが、突然おっしゃられても皆も困るんです。それに食堂にいらっしゃるとは一言も書いてありませんでした。今後は事前にお申し付け下さい。お部屋にご用意いたしますので」

「わかりました」

和成が頂垂れると、塔矢はさらに言葉を続けた。

「それから、お引き合わせしたい者がおりますので、至急執務室へお戻り下さい」

「うどんを食べ終わってからでいいですか？」

和成が箸を持ち上げて笑顔で尋ねると、塔矢は身を屈め和成を覗き込むようにしながら静かに問いかけた。

「至急」の意味をご存じありませんか？ 殿」

塔矢に敬語で静かにすまれると、普通に怒鳴られるよりも怖い。和成は観念すると、箸を置いて立ち上がった。

「……すぐ戻ります」

食べかけのうどんを慎平にまかせて、和成は塔矢の後について食堂を出た。和成が食堂を立ち去ると、静まりかえっていた食堂は、普段の三倍の賑やかさを取り戻した。

君主執務室へと続く廊下を歩きながら、和成は塔矢に問いかけた。

「私に会わせたい人って誰ですか？」

「おまえの護衛だ」

周りに他の人が誰もいなくなると、塔矢の言葉から敬語が抜ける。和成が頼んでそうしてもらっているのだ。今は君主補佐官として和成の側に仕えているが、塔矢は元々、和成の上官だった。

塔矢の言葉に和成は眉を寄せると抗議した。

「護衛はいらないって何度も言ってるじゃないですか。私は元護衛官ですよ。自分の身は自分で守ります」

「おまえがひとりで城下をうるついたりするから、せめて護衛を付けてくれと侍従長に泣き付かれたんだ」

うるざりした表情の塔矢を横目に、和成はガツクリと肩を落とす。「ひとりで城下をうるついたのは十年前に一度だけです。私もあの

時泣き付かれたので、以来ひとりで城外に出た事はありません」

「そんな事はわかつている。だが、今のようにおまえの所在がわからなくなるたびに、繰り言を聞かされるのはいい加減うんざりなんだ。観念しろ。君主様はどうも庶民癖が抜けなくて困ると嘆いてたぞ」

塔矢がからかうような笑顔を向けると、和成は不愉快そうに顔を背けた。

「しょうがないじゃないですか。庶民歴の方が長いんですから」

塔矢はその様子をおもしろそうに笑う。

「人選は一任されたから、俺の部隊からおもしろい奴を選んでおいた。おまえの気に入りそうな名前だぞ」

和成はさほど関心もない様子で、軽くため息をついた。

「別に飲み友達じゃないんですから、おもしろくなくても、気に入らない名前でもかまいませんよ」

「執務室に待たせてある」

塔矢は意味ありげな笑みを浮かべて和成を見ると、軽く背中を叩いて執務室へ促した。

## 2・鏡の中の女の子

塔矢が声をかけて執務室の戸を開けると、入口付近に置かれた椅子に腰掛けていた人物が立ち上がった。塔矢に続いて部屋に入ってきた和成の姿を認めると一礼する。

長い髪を頭の後ろで馬のしっぽのように一つに結んだ小柄なその人は、どう見てもまだ年若い女性に見える。

和成は訝しげにその人を見つめて塔矢に問いかけた。

「塔矢殿、護衛って言いませんでしたか？ 私には女の子に見えるんですけど」

その言葉に目の前の小柄な人物は、途端に不快感を露わにすると、和成を見上げて口を開いた。

「女に護衛など任せられないとおっしゃいますか？ 君主様は切れ者だとお伺いしておりましたが、女性を蔑視なさる頭の固い方だとは存じませんでした。その前時代的お考えは、お改めになった方がよいかと存じます」

和成は面食らって絶句すると、少しの間彼女を凝視した。  
君主になって以来、面と向かって意見する者は塔矢以外にいなかったからだ。

「……女性を蔑視したつもりじゃなかったんだけど、そう聞こえたならすまない」

和成が呆けたように謝罪すると、塔矢が口の端で少し笑いながら和成に視線を送り、彼女の頭にげんこつを落とした。

「差し出口きく前にご挨拶申し上げます」

彼女は頭を押さえて塔矢を少し見た後、和成に向き直り頭を下げた。

「山？月海と申します。<sup>みづき</sup>この度、君主様の護衛官を仰せつかりました。以後、よろしくお願いいたします」

「よろしく」



和成は笑顔で答えた後、月海に尋ねた。

「こんな事訊いたらまた気分を害するのかもしれないけど、どうして軍人になったの？ 体力的にも精神的にも女性には厳しい職務だと思うけど？」

案の定、月海は不愉快そうに眉を寄せると、挑むように和成をまっすぐに見つめて答えた。

「私は幼少の頃より、剣を学んでまいりました。それを生かせる職業に就きたかったからです。体力も剣も男に引けは取りません。何なりとお申し付け下さい」

和成は額に手を当て、目を伏せると軽く嘆息した。

「意気込みは買っけど、女の子がなんでもするなんて言うもんじゃないよ。私が夜伽を命じたら応じるの？」

「そのような命はお断りいたします」

月海は益々不愉快そうに和成を睨むと間髪入れずに拒否した。

「……ああ、そう……」

和成が呆気にとられて、ふと月海の後ろに視線を移すと、塔矢が一生懸命笑いをこらえていた。

なんとなくわかった。塔矢が月海を引き合わせた理由が。

月海は、紗也と初めて会った頃の和成によく似ているのだ。

塔矢と月海から目を逸らして、大きいため息をついた和成を見て、月海が食ってかかった。

「私の腕をお疑いでしたら、お手合わせ願います」

和成は驚いて月海を見つめる。頬を紅潮させて睨みつけていた。どうやら、和成のため息を小馬鹿にされたと勘違いしたらしい。

「控えろ、月海」

塔矢が諫めるのを和成は片手で制した。

「いいよ。真剣勝負といこう」

「え？ 真剣ですか？」

月海が少しためらうような表情を見せた。和成は少し意地悪な笑みを浮かべて月海を見つめる。

「何か不都合でも？ まさか、人を斬った事がないなんて言わないよね？ 人を斬れない護衛はいらないよ」

和成の言葉に月海は再び食ってかかる。

「私は塔矢殿の前線部隊所属です。人が斬れなかったら、今ここにおりません。君主様がお怪我をなさってはと、ご心配申し上げただけです」

「ご心配ありがとうございます。でも、無用だけどね。私は結構強いよ」

静かに見下ろす和成を、月海はムツとした表情で見上げた。

「かしこまりました。真剣でお願いいたします。用意して参りますので、道場にてお待ち頂けますか」

「承知した」

和成の承諾を聞いて、月海は一礼すると執務室を出て行った。

月海を見送った後、塔矢がクスクスと笑い始めた。そして、和成を横目で見つめて言う。

「鏡を見ているようだろう」

和成も目を細くして横目で塔矢を見る。

「……確かに、おもしろい奴ですね」

「確かめなくても、あいつの腕はかなりなものだぞ」

「彼女の腕を疑ってはいません。塔矢殿の人選ですし」

壁に掛けられていた刀を取って腰に差す和成を見ながら、塔矢はおもしろそうに笑った。

「何を考えている？」

和成は振り返ると、逆に問い返した。

「今の塔矢隊で、彼女に勝てる人はどのくらいいますか？」

塔矢は少し考えて、

「古参の隊員が四、五人つてとこかな」

と答えた。

それを聞いて和成は納得して笑いながら何度も頷いた。

「そうじゃないかと思いました。」男にまけるもんか”って全身から滲みだしてますしね。まあ、その實力だと、私にも勝算はあるか

な」

「負けるつもりないだろう」

塔矢はニヤリと笑いながら和成の肩を小突いた。

「ええ。だから真剣勝負にしたんですよ。慣れてないと緊張しますからね。その分私は有利になります」

和成は昔から稽古の時もほとんど真剣を使っていた。人を斬るのが嫌いな和成は戦場でためらわないように、稽古と実戦の感覚の差を減らすためそうしていたのだ。

「ずっと勝ち続けていると、負けるわけにはいかない気分になってきますからね。それで肩に力が入ってるのかなと思って。ちよつと力を抜いた方が、周りが見えてきて彼女のためにもいいんじゃないかと」

「おまえも昔は周りが見えてなかったな」

「そうですね。だから、彼女の肩の力を抜いてあげたいんです。立ち会いをお願いします」

「わかった」

二人は執務室を出て道場へ向かう。時間は午後二時になるうとしていた。塔矢隊の稽古の時間である。

### 3・真剣勝負

首筋で寸止めされた刃に視線を向けると、緊張した面持ちで月海は呟いた。

「……まいりました」

「そこまで！」

塔矢の合図で和成は刀を退いて鞘に収めた。月海も刀を収め互いに一礼すると、周りで見物していた隊員たちが月海に駆け寄ってきた。

「おまえの方から勝負を挑んだって？」

「知らないってのは命知らずだよなあ。和成……殿に勝負を挑むなんて」

口々にからかう古参の隊員たちに月海はムツとして答える。

「君主様の腕を知っていても挑んでいました。それに、ご自身の口からお強いと伺ってありましたし」

古参の隊員、里志さとしは呆れたようにため息をつく、月海の額を指で弾いた。

「おまえ、全然わかってないな。今の勝負、傍目にはいい勝負に見えたけど、殿は力半分も出していなかったぞ」

「え？」

月海は少し里志を見つめた後、和成に尋ねた。

「本当ですか？」

「半分つてのは大袈裟だけど、全力でなかったのは認めるよ」

和成が苦笑すると、月海は拳を握って和成を睨みつけた。握りしめた両の拳が小刻みに震える。

「バカにしないで下さい！ 私は全力で挑みました！ 女なんかまともに相手にできないってことですか？！」

「月海！ 口を慎め！」

怒鳴りながら和成に詰め寄る月海を、里志が押しとどめる。今にも掴みかかってきそうな月海を見据えて、和成は静かに問いかけた。「君は私と勝負することが目的だったの？」

月海はハッとして目を見開くと動きを止めた。

「私は君の実力を見るのが目的だったんだけど。だから君が実力を出し切る前に、全力で打ち負かすわけにはいかなかったんだよ」

元々、自分の腕を見極めて欲しいと手合わせを申し出たことを月海はすっかり忘れていた。見当違いなことで和成を非難したのが途端に恥ずかしくなり、月海は赤くなって和成に深々と頭を下げた。

「申し訳ありませんでした。ご無礼をお許し下さい」

少しして身体を起こすと、月海は俯いたまま和成に問いかけた。

「私は護衛失格ですよ」

「いや、合格だよ」

弾かれたように顔を上げて見つめると、和成はにつこりと微笑んだ。少年のように無邪気な笑顔が月海の神経を逆なでする。

「……同情などいりません。相手の力量を見極めることもできない未熟な私など……」

目を伏せて不愉快そうに呟く月海を、和成は眉を寄せてうんざりしたように見つめると、軽くため息をついた。

「弱い奴に同情したって意味がない。同情して弱い奴に護衛を任せたんじゃ、私の身を守ってはもらえないだろう？」

月海は益々項垂れると力なく謝罪した。

「申し訳ありません……」

「そんなに気落ちする必要ないよ。今ここにいる中で私に勝てるのって、塔矢殿と里志殿だけだもの。君が二人に勝てるのなら落ち込んでもいいけど」

月海が驚いて顔を上げると和成はおもしろそうに笑っていた。

最初から自分が勝てる相手ではなかったのだ。それがわかった途端、張り詰めていた気が一気に弛んだ。同時にからかわれたような気がしてちよつと不愉快になった。

「……結構強い程度の水準ではないじゃないですか。なのに、私ごときに真剣勝負だなんてお人が悪うございます」

ふてくされて口をとがらせる月海に、和成は笑って右手を差し出した。

「君があんまり自信满满だったから、私もヤバイかなと思って。これからは護衛よろしく」

「……よろしくお願いいたします」

月海は気まずそうに上目遣いで和成を見つめると、差し出された右手を握り返した。

「じゃ」

そう言って和成は、通りすがりに月海の肩を軽く叩くと道場の出口へ向かった。

月海は慌てて振り返ると、身体を直角に折り曲げて和成に深く頭を下げた。

「君主様！ ご無礼の数々、誠に申し訳ありませんでした！」

和成は振り向いて微笑むと、軽く手を挙げてそのまま道場を出て行った。その後を追うように、塔矢も道場を後にした。

月海はしばらくの間、道場の出入り口を見つめて、ぼんやりと立ち尽くした。

和成に肩を叩かれた時、肩にのしかかっていた何かが全て取り除かれたような気がした。そして、これまで感じたことのない不思議な心の高揚感を覚えた。

胸を押さえて、その心地よさに目を細めると自然に口元が緩んだ。

#### 4・時間旅行

執務室に戻った和成に、塔矢は席に付くことを許さなかった。

「今日中に部屋を明け渡して正規の居室に移っておけよ」

「ええ？ 他に部屋はないんですか？」

悪あがきをする和成を塔矢は一蹴する。

「ない。おまえこそ、ちゃんとした部屋があるのに他の部屋を使うな」

和成はガツクリ肩を落とした。

「私にあの部屋は広すぎるんですよ」

和成は君主になってからも、それまで使っていた部屋を使い続けていた。警備の都合上問題があるので、侍従長と塔矢から再三に渡って正規の居室に移るように言われていたが、頑なに拒否し続けていた。

この度、護衛官を任命するに当たって、その点も合わせて塔矢は侍従長から頼まれていたのだ。

和成は大きいため息をつく、諦めて君主の居室へと向かった。

現在の部屋の向こうにある渡り廊下を越えると、君主の居室がある。紗也がいなくなってから和成は、その広い居室のうち謁見室と食堂と浴室とお手洗い以外使ったことがない。

紗也と共に最後の幸せな時を過ごした寝室の場所は覚えているが、それ以外は侍従と女官の控え室を除くと、どこに何があるのかさっぱりわからないのだ。まずは居室内の探検から始めなければならなかった。

紗也には親族がない。配偶者である和成が何の命令も下さないで、部屋の掃除はされているものの、紗也の私物は十二年前のまま手付かずで放置されているらしい。

中でも、和成が知っている紗也の寝室は、部屋に風を通して床を掃き清める以外、何も手を触れていないという。生前、紗也が寝台には一切手を触れないように命じたためである。

和成にはその理由がわかっていた。

そこには、紗也が大切にしていた、紗也だけが知っている和成の秘密の一つが隠されていたからだ。

和成はそれを確かめるために、真っ先に寝室へ向かった。

部屋の戸を開けると、十二年前と変わらず、広い部屋の真ん中に大きな寝台があった。和成は寝台に歩み寄ると、布団をめくり思わず声を上げて笑った。

「やっぱり、まだあった」

そこには、紗也が抱き枕にしていた和成の上着が、十二年前と同じ状態で横たわっていた。

和成は上着を引っ張り出して小脇に抱え、布団を元に戻すと寝室を出た。

次に覗いた部屋は書斎だった。入口を入った左手に大きめの机が一つ置かれ、あとは図書館のように本棚が並んでいた。

本を読むのが好きな和成は、目を輝かせて本棚を眺め部屋の中をゆつくりと歩いた。

「ここは、もつと早く来てみればよかったな」

ふと、本棚の真ん中辺りに背表紙の少し飛び出した本が目にとまった。

手に取ってみると、少し難しい経済学の本のようだ。冒頭から五分の一くらいのところ、押し花の付いた栞が挟んであるのを見て、和成は目を細めた。

「へえ、少しは勉強してたんだ」

和成は栞をはずし、本を元に戻すと書斎を出た。

さらに二、三の部屋を覗いた後、たどり着いた部屋はこれまで見た部屋とは明らかに違っていた。そこには女の子の生活の匂いが漂っている。紗也の私室に違いない。



部屋のあちこちに人形や造花が飾られ、鏡台の鏡の前には色とりどりの瓶が並んでいる。

よく見ると、調度品や雑貨、小物入れ、人形の着物に、窓にかけられた日よけの布まで、花柄のものが多い。

和成は書斎から持ってきた栞の押し花をチラリと見て呟いた。

「花が好きだったのかな」

そういえば、浜崎の国境で椿の花を持って帰ろうとしていた。

考えてみれば、紗也の個人的なことはほとんど知らない。

祝宴などに同席したことがあるので、食べ物好き嫌いは多少知っているが、何が好きで何に興味を持っていたのか全く知らない。

話をして基本的な和成は聞き役で、何かを訊きたくても家臣の身では立ち入ったことを訊くわけにもいかなかった。

紗也の好きなことや喜ぶことを何ひとつ知らなかったから、誰にも知られてはならない想いだったから、紗也に何も贈り物をしたことがない。想いを伝える言葉さえも。

和成は何の気なしに、鏡台の一番上の引き出しを引いた。引き出しの中は髪飾りがたくさん入っていた。髪飾りも花をかたどったものが多い。

引き出しの隅に一つだけ、透明な箱に入った青い花の髪飾りがあった。明らかに別格なその髪飾りを持ち上げて和成は見つめた。

「これ……」

そして、すっかり忘れ去っていた記憶が蘇った。

紗也が十五才の時、お気に入り青い花の髪飾りがなくなったと言って、朝からずっと不機嫌だったことがある。

その日和成は、塔矢の手伝いで朝から執務室にいた。よほどその髪飾りが気に入っていたのか、作業する和成の横で半日グズグズ言われうんざりしたので、昼休みに城下に出て青い花の髪飾りを買ってきたのだ。

紗也のなくした物がどんな物か知らないので、同じ物ではなかったはずだが、紗也は大層喜び、午後からの作業は滞りなく円滑に行

われ、和成はホツとした。

和成にとっては、紗也の邪魔をうまくあしらった日常の些細な出来事のひとつで、すぐに忘れてしまっていた。

だが、思い返しても紗也がこの髪飾りを付けていたのを見た覚えがない。

和成は思わずクスリと笑った。

「これも、俺の秘密だったのかな」

見覚えのない青い花の髪飾りを付けて、女官たちに指摘され、和成からもらったと教えなくなかったのだろう。

和成は髪飾りを懷にしまつと、引き出しを戻し、部屋を出た。

残り三つの部屋は、皆同じような部屋だった。今の和成の部屋より一回り広く、寝台と小さな洗面台と流しが備えられている。来客用の客室のようだ。

和成はその内の一つを私室にしようと決めて、荷物を運び込んだ。あの広い寝室の布団は干してもらうことにして、紗也の私室は引き続きそのままにした。

いずれ自分が退位する時にでも、片付けてもらおう。

## 5・夜の不思議

翌日、長い間和成の使っていた部屋に月海が引越してきた。

荷物の整理が終わり、月海は自室前の中庭へと降りる石段に座ると、真新しい認証札を眺めた。

これまで入ることのできなかった城内のほとんどの場所に入ることのできる認証札だ。

どこか探検に行ってみようかと考えていると、後ろから声がした。  
「もう片付いた？」

振り返ると和成が立っていた。月海は慌てて立ち上がると頭を下げた。

「つい先ほど片付きました。あまり荷物ありませんし」

「そうなんだ。大変そうだったら手伝おうかと思ったんだけど」

軽く言う和成に恐縮して、月海は激しく手を振りながら一歩退いた。

「君主様にお手伝いいただくなど、とんでもないことでございます！」

あまりに恐縮した様子に、和成は思わず苦笑する。

「頼むから、その”君主様”つてのやめてくれないかな」

「え？ では何とお呼びすれば……」

「名前でいいよ」

「和成様……ですか？」

月海が恐る恐る名前を呼ぶと、和成はにっこり微笑んだ。

「うん。その方がいい。どうも”君主様”とか”殿”とか呼ばれるの、未だに慣れなくて」

照れくさそうに頭をかく和成の笑顔に、月海の目は釘付けになる。  
「部屋の中はきれいだった？」

ぼんやり見とれていると、不意に和成がこちらを向いた。視線がぶつかり、ドキリとして思わずうつろたえる。

「あ、はい。大丈夫です」

「そう、よかった。昨日慌てて片付けたからさ。一応、布団を変えて掃除はしてもらったんだけど、おやじ臭かったらごめん」

片手で拝むような格好をする和成を見て、月海は不思議そうに首を傾げた。

「どなたか、この部屋をお使いだったんですか？」

「昨日まで私がいたんだよ」

「え?! だって、見たことはありませんけど、この向こうに広くて立派なお部屋があるとお伺いしておりますが……!」

そう言いながら月海は渡り廊下の向こうを指差した。和成は気まずそうに笑う。

「うん。確かにそうなんだけど、広くて立派すぎて、どうも落ち着かなくてね……。私は侍従長から庶民癖の抜けない困った君主だと言われてるんだよ」

「はぁ……」

月海はどう反応していいかわからず笑顔を引きつらせる。

「あ、でも、おやじ臭くはないですよ。和成様お若いのですし……」

月海が慌てて取り繕うと、和成は意外そうに目を見開いた。

「もしかして……私の年、聞いてない？」

「はい？」

月海はキョトンと首を傾げる。

和成は軽く嘆息すると、少年のような顔に苦笑を湛えて、月海にはにわかに信じ難いことを告げた。

「こう見えても私は三十九才なんだ。今年で四十になる立派なおやじだよ」

月海は思い切り目を見開いて絶句すると、しばらくの間和成の顔を凝視した後、大声を上げた。

「ええ?! 本当ですか?! 私より十七才も年上?! 全然見え

ません！」

「私もそう思うよ」

そう言って少し天井を見上げた和成を見つめて、月海はやはり信じられずにいた。

和成の見た目はどう見ても十七、八の少年にしか見えない。けれど塔矢隊の先輩たちの様子から見て、年上だろうとは思っていたが、三十には届いていないと踏んでいた。

どこかに年齢を感じさせるところはないかと観察してみるが、肌も髪もうらやましいくらいに色艶がよく若々しい。それに昨日の太刀さばきも身のこなしも、実戦から遠ざかって久しいとは思えないほど見事だった。

あまりに不躰にじろじろと見ていたらしく、和成が照れくさそうに顔を背けた。

「若い女の子に、そんなに見つめられたら照れるね」

月海はハツとして視線を外すと頭を下げた。

「し、失礼いたしました」

「おいで、月海。侍従たちに紹介しよう」

顔を上げると、渡り廊下の手前で和成が笑いながら手招いていた。初めて和成に名前を呼ばれ、心が弾んだ。

「はい！」

月海はうきうきした気分のまま元気に返事をする、和成に駆け寄った。

その夜月海は、布団の中でゴロゴロといつまでも眠れずにいた。枕が変わったこともあるが、今自分のいる部屋に昨日まで和成がいたかと思うと、なんだかドキドキして目が冴えてしまったのだ。

和成が自分よりも自分の親に年齢が近いのにも驚いた。

頭の中で自分の父親と和成を並べて比べてみる。そして、クスリ

と笑った。

「全然お父さんには見えない。だって、和成様は頭がよくて、強くて、男前で、お父さんより断然かっこいいもの」

気がつけば和成のことばかり考えていた。

自分の名を呼ぶ和成の声を思い浮かべる。和成に呼ばれると自分の名前が甘い響きを奏でるような気がした。

頭の中で和成の声を繰り返し再生するたびに、心が弾み自然に顔がにやけてきた。

頭の中で響く声に応えるようにその名を呼ぶ。

『月海』

「和成様……へへっ」

益々顔がにやける。

『月海』

「うふふ……和成様」

名前を呼ぶたび、気持ちがい上がりそうになる。

『月海』

「か・ず・な・り・さ・ま……きゃああ」

照れくさいのか、嬉しいのか、楽しいのか、よくわからない。それらがごちゃ混ぜになった不思議な感情が極限に達して、月海はじつとしていられなくなり、布団を抱きしめて寝台の上を駆け回った。しばし後、布団をはねのけて勢いよく身体を起こすと、冷めた自分がポツリと呟いた。

「……私、バカ？」

月海はため息と共に寝台を下りると、上着を羽織って廊下へ出た。少し頭を冷やそうと、中庭へと降りる石段に腰を下ろす。

真夜中の静寂の中、中庭の木々は月光に青白く照らされていた。桜はチラホラと花を咲かせ始めている。自室にいながらにして花見ができるとは、なんて贅沢なんだろうと月海は思った。

見上げると、雲ひとつない夜空に、ほとんど満月に近い明るい月が出ていた。

ふと、視界の隅に人影が見えた。月海は立ち上がり、そちらへ視線を向ける。

もつと近くで見ようと、渡り廊下の手前まで静かに廊下を移動した。近付くと人影の正体は和成であることが判明した。

和成は君主居室を取り囲む生け垣の前で立ち止まり、中庭側を向いて月を見上げた。しばらくそのまま、じっと月を見上げている。

真夜中に何をやっているのか気になって、月海は目を逸らせずにいた。

すると和成は月に向かって何かを語りかけた後、そのまま目を閉じ幸せそうに微笑んだ。少しして和成はその場を離れると庭の奥に姿を消した。

まるで月が見せた幻のようだ。

幸せそうに微笑む和成の笑顔と、不思議な光景が目には焼き付いて離れない。和成が何を言っていたのかも気になった。

月海はしばらくの間廊下の柱に縋り、その場を動けなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3733z/>

---

月下の幻影

2011年12月16日21時53分発行